ふるさと便り

―「上越タイムス」の記事より―

「越ノ浪」三段目定着目指す

（一月七日）

上越出身唯一の現役力士。越ノ浪友弥さん（二十歳）は故郷を離れ三年目の今年、三段目の定着を目指し初場所に挑む。

柿崎小四年の時に柿崎国技会で相撲に取組み、柿崎中では柔道部に所属しながら相撲を続けた。進学した高田農業高ではチームの主将を務め、国体県少年選抜にも選ばれた。

三年時の大会で立浪部屋のスカウトから声がかかり、プロ行きを決意。平成二十二年一月に初土俵を踏んだ。

これまでの戦績は十二場所で三十八勝三十二敗。昨年の九月場所、序二段東二十七枚目で五勝二敗と勝ち越し、初めて三段目に昇進。「やっと上がれた」のもつかの間、十一月の九州場所で二勝五敗と負け越してしまった。

場所後、立浪親方から「頭から行け」との教えを受けた。胸からではなく頭から激しく当たり、押し相撲での短期勝負を目指している。

大部屋に十人で暮らす生活は『最初はとまどった』が、厳しく優しい親方と尊敬できる先輩、気の合う後輩に囲まれアットホームに過ごす。ちゃんこ当番も手慣れてきたという。楽しみは自由時間の外出と「寝ることが好き」。

飯山スキー発祥百周年滑走

（一月二四日）

上越市の翌年にスキーがつたえられ、今年で百周年になる長野県飯山市で二十三日、「長野県スキー発祥の地　記念滑走」のイベントが開かれた。同市のスキー関係者、職員、飯山小の子供等約五十人が参加。百年前の同日の偉業に思いをはせ、スキー伝承・発展の願いを込めた。

ゲンギョを天日干し

（一月二六日）

名立区小泊の民宿「魚喜」でゲンギョ（和名ノロゲンゲ）の天日干しが始まっている。三浦初美さん（七六）が四十年ほど前から、名立や能生漁港で水揚げされたゲンギョを串に刺して縄に吊るしていく。日本海から吹き付ける冷たい潮風にさらされ、うまみも増していく。

ゲンギョは「幻魚」とも書く深海魚。体長二〇―三〇㌢で、水圧に耐えられるようゼラチン質に覆われている。甘エビ漁の底引き網で一緒に捕れ、地元では古くから珍味として食べられてきたという。軽くあぶるのが主流だが、てんぷらや昆布巻きにしても。

大寒から三月ごろまでが一番おいしい時期。

二十六年ぶり積雪二㍍（高田）

（二月十一日）

上越市高田の積雪が十日、二㍍を超えた。昭和五十九年から続いた「三年豪雪」時の昭和六十一年以来、二十六年ぶりになる。今後も降雪が予想されていることから警戒が必要だ。

同地区の積雪量観測点は同市大手町の旧高田測候所。十日正午から午後一時にかけて積雪二〇四㌢を記録。近年最も多いとされていた平成十八年の「十八年豪雪」時の一六二㌢を上回っている。

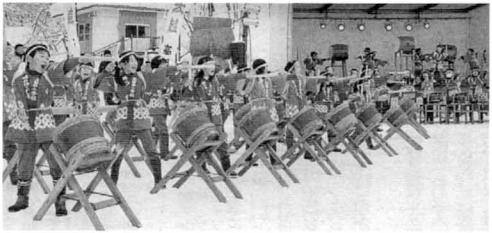
同市の高田市街地は八日までに一斉雪降ろしと排雪作業を終えたばかり。十三区の観測点のうち牧区棚広新田で十日午前九時までの積雪量が五三二㌢と今冬最高を観測。ほかの四カ所でも積雪四㍍を超えている。

豪雪被害把握のため五日に平野辰男防災担当大臣（当時）が来越。泉田裕彦県知事や村山秀幸上越市長、入村明妙高市長、米田徹糸魚川市長ら十二市町長が除排雪経費の財政支援、空き家対策、災害救助法適用期間の延長などを要望した。

レルヒ祭一〇一年目のにぎわい

（二月十四日）

日本にスキーを伝えたオーストリア・ハンガリー帝国の軍人、レルヒ少佐の偉業を顕彰する「日本スキー発祥百一周年レルヒ祭」が十一、十二の両日、上越市の金谷山スキー場と本町商店街で行われた。幸い二日間とも荒天にならず、合わせて一万千五百人が訪れ、にぎわった。



上越―東京は一時間四十八分

（二月二十九日）

国土交通省は二十七日の交通政策審議会陸上交通分科会鉄道部会第四回整備新幹線小委員会（委員長・家田仁東京大学大学院教授）で、敦賀延伸分も含めた北陸新幹線各駅間の所要時間や料金などを初めて公表した。（仮称）上越駅は「速達型」に位置付けられ、東京まで一時間四十八分、「各駅停車型」の糸魚川駅は同二時間二十九分とそれぞれ試算された。

現行の特急「はくたか」と上越新幹線を乗り継ぐ場合に比べ、東京まで十四分短縮される。上越から長野までは十八分、糸魚川までは十二分、金沢までは四十八分で到着する。

■（仮）上越、糸魚川駅からの所要時間と特急料金

	東京	高崎	長野	飯山	（仮）上越	糸魚川	富山	金沢	敦賀
（仮）上越	1時間48分	57分	18分				30分	48分	1時間32分
	2時間16分	1時間17分	22分	11分		12分	38分	1時間	1時間55分
	4,080円	3,030円	2,300円	840円		840円	3,030円	3,030円	3,880円
糸魚川	2時間29分	1時間30分	35分	24分	12分		25分	47分	1時間42分
	4,810円	3,880円	2,300円	2,300円	840円		2,300円	3,030円	3,880円

※（仮）上越の上段は速達型、同中段と糸魚川は各駅停車型での試算。点線下は新幹線特急料金

県文化財に指定へ

（三月六日）

県文化保護審議会（伊藤義博会長）が五日に開かれ、県文化財指定などの答申が出された。上越市からは榊原家資料と裏山遺跡出土品が選ばれた。

裏山遺跡（同市岩木）は弥生時代後期の高地性の環濠集落跡で標高九十二㍍。視野の開けた険しい台地に立地し、堀が発見されていることから居住地より砦としての性格が考えられる。四千点以上の出土品から土器、石器、鉄器など百二点が指定されることになった。

榊原家資料は高田藩最後の

藩主、榊原家に伝来した資料群一万六千三百十八点。総合博物館と高田図書館に納められている。藩政日記や藩士の家の文書などを中心とした「榊原家文書」、藩校修道館が所蔵していた「修道館文庫」、榊原家由来の資料などの「榊原家資料」からなる。各地を転封した譜代大名の資料として充実しており注目されている。

榊原家資料

裏山遺跡から出土した鉄器

板倉区國川　地すべり拡大（三月十日）

板倉区國川で七日午後に確認された地すべりは八日、二十一世帯八十人に避難勧告が出され、その規模が拡大している。夜が明けた九日、雪を巻き込んだ土砂の波は徐々に民家近くまで迫り、土砂雪を押しとどめる大きな土の壁を積み警戒を強化。地元住民は避難体制を整え、不安と驚きをもって行方を見守っている。土砂で埋まったほ場は春耕への影響が危惧されている。同日、村山秀幸市長が現地入りした。

山が幅150m、長さ500mにわたり崩れ落ちた（9日早朝に上空から撮影、新潟県提供）

「北国」「日本海」ラストラン（三月十八日）

利用者の減少や車両の老朽化に伴い十六日発で定期運行を終えたJR寝台特急「日本海（大阪―青森）」と急行「きたぐに」（大阪―新潟）が、十六日夜から十七日未明にかけJR直江津駅に停車した。これまで両列車が同時に同駅に停車することはなかったが、ダイヤ調整の関係で二分三十秒という短い時間ながら、ラストランで並んでの停車が実現。この姿を記録しようと二百人を超す鉄道ファンが訪れた。

青森行きの「日本海」が十六日午後十一時五十七分に到着すると、車内から続々と乗客が降り立った。

大阪行きの「きたぐに」が十七日午前零時五十五分に到着し、「日本海」と並ぶと、待ち構えていたファンが写真やビデオに収めていた。

同駅の小池裕明駅長は「これだけ名残を惜しんでいただき、いろいろな思い出がある人が多いと感じました。二分三十秒のランデブーを楽しんでいただけたのでは」と話していた。

大阪へ向かう最終列車と、青森へ向かう最終列車が直江津駅で並んだ。ダイヤ調整のためだが、ファンにとっては「珠玉の時間」だったという

陽光浴び早春の風物詩（三月三十一日）

好天にめぐまれた三十日、上越市有間川町内会（高橋誠一町内会長）の住民が桑取川河口で特産のカタノリを採集した。午前八時三十分の合図で参加者が一斉に早春の海へ。中腰で、岩についているノリを慣れた手つきで摘み取っていった。

高橋フミさん（七一）は「今日は暖かくて良かったし、いっぱい採れた。カタノリはみそ汁で食べるのがおいしい」と笑顔で話していた。有間川産のカタノリは人気があり、ほとんどが知り合いなどに販売されている。

直江津高校卒業式 最後の学びや後に

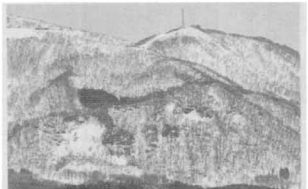
（三月四日）

県立直江津高（山岸克夫校長）は三日、第六十二回卒業式を開いた。同校は三月をもって百年の歴史に幕を閉じる。最後の卒業生となる百二十二人が晴れやかな表情で式に臨み、友と母校との別れを惜しんだ。

山岸校長は式辞で、スティーブ・ジョブス氏の言葉『Stay hungry，stay foolish』を引用。卒業証書を手にした卒業生は、中等吹奏楽部の演奏による「蛍の光」に送られて学びやを後にした。

見える？見えない？タヌキの顔

（四月五日）



見える人には見えるのだが…

「今の季節、尾神岳にはタヌキの横顔が出ているんですよ。雪型とは言えないけれど、杉の生え方なんだね。行けば分かりますよ」と吉川区に住む会社員Iさんからの情報提供。思いがけない電話をくれたIさんは田んぼの地力増強にレンゲを育て、花畑でコンサートを開く夢多き人だ。

半信半疑で尾神岳に向かうと…「なるほど」。視界に大きくそれが飛び込んできた。二十年来、尾神岳のふもとで仕事をしていてなぜ気付かなかったのか。不思議だ。

意気揚々、会社に帰る。吉川区に住む上司に写真を見せると「見えないね」と二べもない。ほかの記者達に見せる。連続十五人が「何も見えない」という。これまた不思議である。

第八十七回高田城百万人観桜会 桜満開

（四月二十二日）

寒すぎた冬。春の大嵐…いつにも増して待ち遠しかった今年の観桜会。満開から花吹雪まで、これからの一週間。切ないまでに美しい季節は今。人々は心を開き、体の力を抜いて、花に人に酔いしれる。

芳澤謙吉ゆかりの茶室「米南荘」をお披露目

（四月二十六日）

上越市の芳澤謙吉翁顕彰会（古川正美会長）と諏訪の里づくり協議会（川上義人会長）は二十二日、同市諏訪の芳澤記念公園で「米南茶会」を開き、地域活動支援事業により昨年移設、改修した謙吉ゆかりの茶室「米南荘」をお披露目した。

外務大臣や外交官を歴任した郷土の偉人をより多くの人に知ってほしいと初めて企画した。強風の中、市民が続々と集まり満開の桜とお茶を楽しみながら謙吉の功績を再認識した。謙吉の孫で芳澤家の当主の芳澤忠雄さんと元ニュージーランド大使の井口武夫さんら親族七人も訪れた。忠雄さんは孫の一人で国連難民高等弁務官を務めた緒方貞子さんのメッセージも届けた。

上杉おもてなし武将隊 活動一年もてなし進化

（四月二十六日）

上越市を訪れる観光客をもてなし、上越市や春日山などを全国にPRしている「越後上越　上杉おもてなし武将隊」は、同市大豆の春日山神社境内でおもてなし演武を再開した。春日山を訪れる多くの人をもてなしている。

活動を開始してからもうすぐ一年。上杉謙信、春日山城などに関するクイズに加え、出演者によって変わるなど演武の内容も一新。上杉謙信役は「越後の諸将たちを紹介し、生き方、思いを伝えられたら。組み合わせも色々あるので楽しんでもらえるとおもう」と。

陸前高田高校を訪問

（五月二日）

新潟県立高田高校校友会（大島精次会長）の高舘徹夫幹事長と東京支部の樫野利介副支部長、上野邦治幹事長ら六人がこのほど、岩手県の陸前高田高校を訪ね、大震災の見舞いと復興の願いを伝えた。校友会は同じ校名の縁から復興を支援したいと、二度の募金活動を行い、計百八十三万円を図書館の充実にと同校に送った。

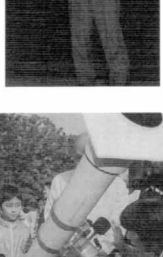
百歳の日野原さん登壇 軽妙な語りに重み

（五月十三日）

上越市本町二の石田眼科本院（石田誠夫院長）の新築移転を記念した講演会が十二日、同市の上越文化会館で開かれた。聖路加国際病院理事長の日野原重明さん（百歳）が講師に招かれ、自身の体験も織り交ぜつつ、健康長寿は「日ごろの生活習慣から」と力説した。

大ホールを埋めた入場者から万雷の拍手を浴び、力強い足取りで登壇した日野原さんは、「私の生涯の歩みが、みなさんの衝撃となれば」と切り出し講演を始めた。

高齢化の進展著しい中で、多くの人が感じる幸せは「健康」とする調査結果を示しながら、がんや心疾患、脳血管疾患など死因の六割は生活習慣が起因と指摘。日常生活からの健康に対する意識を求めた。また、おろそかにされがちな公衆道徳の重要性も示し、折に触れて紹介しているという自身の格言「一習慣が作るからだも心も」を披露。心身の健康へ意を用いるよう呼び掛けた。



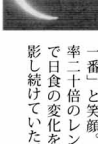
上越でも部分日食

（五月二十二日）

日本列島各地で金環日食が見られた二十一日、上越市内でも部分日食が観測された。絶好の青空が広がった早朝、清里区の星のふるさと館はリージョンプラザ上越前で観察会を実施。珍しい天体賞を見ようと約百五十人が集まり、神秘の瞬間に立ち会った。

同市で部分日食が観測されるのは平成二十一年七月以来、約二年十カ月ぶり。午前六時二十二分に日食が始まり、同七時三十六分頃ピークを迎え、太陽の約九割が隠れた。

星のふるさと館の天文指導員、細谷一さん（七〇）は「前回はガスがかかって駄目だった。今回のコンディションは今までの中で一番」と笑顔。倍率二十倍のレンズで日食の変化を撮影し続けていた。



第十三回高田城ロードレース
沿道市民が熱い声援

（六月四日）

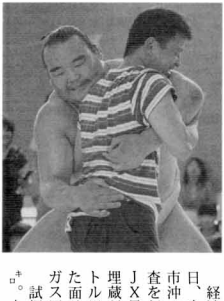
第十三回高田城ロードレース大会（上越市、上越市教育委員会、上越市体育協会主催）は三日、雁木通りプラザ前を発着点に行われた。全国から集まった選手は昨年を四百三十六人上回る二千百九十四人。沿道で待つ市民のあたたかい声援にこたえながら、初夏の上越市内を快走した。

ツチノコ大捜査
全国から六十人が参加

（六月十二日）

伝説の生物、ツチノコの発見、捕獲を目指す「つちのこ探検隊」（丸山隆志隊長）が十日、目撃情報のある糸魚川市能生地域のシャルマン火打スキー場付近で行われた。あいにくの雨天となったが、参加者は元気いっぱいに大捜査を繰り広げた。捜査は目撃情報のある二カ所を中心に実施。ぬかるんだ斜面に足を取られて悪戦苦闘しながらツチノコを探した。

全国から捜査隊員が集まる同催し、七回目の今年は約六十人が参加。



雑草が出て雨にぬれる斜面を苦労しながら登った

人気力士と〝真剣勝負〟

（六月十八日）

運動で親子のコミュニケーションや体力の向上を図る「父子チャレンジアカデミー」（NPO法人幼児教育従業者研究開発機構主催）が父の日の十七日、上越市高田スポーツセンターで開かれた。東関部屋の東関大五郎親方（元幕内・潮丸）、十両・高見盛関ら四人を講師に、約二百人が相撲の魅力と運動の楽しさを味わった。

巨大な高世相手に、幼・保育園児が集団で挑戦。会場

上越沖に油田、ガス田か
国内最大級の可能性
来年四月から試掘

（六月二十日）

経済産業省資源エネルギー庁は十八日、来年四月から六月にかけて、上越市沖の日本海で石油・天然ガス試掘調査を行うと発表した。試掘を手がけるＪＸ日鉱日石開発（東京都）によると、埋蔵が予想される区域は百平方キロメートル以上で、柿崎区と大潟区を合わせた面積を上回る。国内最大級の油田・ガス田となる可能性を秘めている。

試掘を行う海域は佐渡南西沖約三十キロ。上越市の沖五十キロ地点で、日本の排他的経済水域内。平成二十年に行った三次元物理探査船「資源」による当該海域調査の結果、石油またはガス田の存在が有望視されている。ＪＸ日鉱日石開発によると、水深一、一〇〇メートルにある海底から約二千七百メートル掘り下げて調査する。事業管理は石油天然ガス・金属鉱物資源機構（東京都）が行う。資源エネルギー庁によると、地元漁業者との調整や試掘に向けた準備作業を進めているという。

試掘実施を受け、県新エネルギー資源開発室の松田英世室長は「（国内）数カ所の中で（上越沖が）選ばれたと聞いている。今でも本県は石油・ガスを全国的に見て多く算出しているが、うまく調査が進み、国内最大級といわれる規模であればますます期待される。埋蔵量やコストは不明だが、今後有望となれば大きな希望が持てる」と話した。

山崎元審判員が講義

（六月二十一日）

上越市南本町小（熊本泰広校長）は十八日、五、六年生百二十三人の総合学習として、同校ＯＢの元プロ野球審判員で、現在日本野球機構（ＮＰＢ）審判技術委員の山崎夏生さん（五六）を講師に招き、生き方を学ぶ講義を受けた。

審判員の道具を説明する山崎さん

日本海ひすいライン 妙高はねうまライン 「えちごときめき鉄道」に決定

（六月二十三日）

平成二十七年春の北陸新幹線開業とともにＪＲから並行在来線の経営を引き継ぐ新潟県並行在来線株式会社（嶋津忠裕社長）は二十二日、県庁で記者会見し、新社名と二つの新路線名の候補を示した。

新社名は「えちごときめき鉄道株式会社」。新路線名は、現ＪＲ北陸本線・直江津駅―市振駅間の「日本海ひすいライン」と現ＪＲ信越本線・直江津駅―妙高高原駅間の「妙高はねうまライン」。二十九日の株主総会決議を経て七月一日に社名を変更する。

並行在来線となる鉄路で妙高方面に走り出す電車。

昨年十二月から今年二月まで公募し集まった二千二百十五通をもとに、学識経験者や沿線市商工会議所などで構成する検討委員会、株主アンケートから選定。商標登録の可否を検討した上で社名案六件、路線名案各九件に絞り込み、二十日の取締役会で全国への発信力や名称間のバランスを考慮して決定した。

谷浜海水浴場海開き

（六月二十五日）

上越市内にある四海水浴場の先陣を切って二十四日、谷浜海水浴場が海開きした。この日は快晴に恵まれてさわやかな潮風が吹き渡り、波打ち際では早速、子供たちがはしゃぐ姿が見られた。

午前は神事が行われ、関係者が玉ぐしをささげて一夏の安全と千客万来を願った。

同海水浴場は来年で百周年を迎える事もあり、谷浜観光協会の田中弘邦会長は「かってこの海水浴場は北陸随一と言われたが、時代とともにだいぶ変わってきた。協会として大いに宣伝し、大勢のお客様に来ていただいて昔のにぎわいを取り戻したい」と話した。

上越火力が本格稼働

（七月一日）

中部電力は、上越市八千浦地区に建設を進める上越火力発電所の一―一号機について、きょう一日に営業運転を開始する。着工から五年、市内初の火力発電所がいよいよ本格稼働する。

長野市にある新北信変電所まで約六十二キロの送電線で電力を送る。

今後は一―二号機が平成二十五年一月、二―一号機が同七月、二―二号機が二十六年五月に営業運転を始める予定。全て稼働すると出力は三三七万キロワットとなり、停止中の浜岡原発三、四、五号機の総出力三六一万キロワットの六割以上になる。

高田公園北堀のハス 東洋一咲き始め

（七月四日）

上越市の高田公園北堀のハスが咲き始めた。東洋一といわれる同公園のハスを楽しむ上越ハスまつりは、二十七日から始まる。

海水浴場大にぎわい

（八月六日）

連日、うだるような暑さが続き、上越市内の各海水浴場は長野や群馬など県外客を中心ににぎわいを見せている。

八月最初の日曜日となった五日、たにはま海水浴場は色とりどりのパラソルやテントの花が咲き、家族連れなど大勢の海水浴客で込み合った。高田で最高気温三四・五度の酷暑となる中、気持ちよさそうに泳ぎ、水遊びしてはしゃぐ子どもたちの歓声が響いた。

毎年、谷浜に来ているという長野県の五家族の団体は「遠浅で子どもが遊ぶにはちょうどいい」と、すっかりとりこに。谷浜観光協会のスタッフは「晴天が続いて入り込みはいいけど、ちょっと暑すぎるね」と連日の暑さに外出を控える動きも心配していた。

海浜管理所前のビーチでは約三百人参加のスイカ割り大会やカニ汁、おにぎりの販売イベントが行われた。

ヒマワリ十二万本咲きました

（八月八日）

上越地域で病院や福祉施設、専門学校を手がける「和・道グループ」は十日午前十時三十分から、上越市南新保の「つくしファームひまわり畑」で、「越後ひまわり祭り」を開く。夏の日差しに揺れるヒマワリの中でコンサートが行われ、クッキーの無料配布もある。入場無料。

昨年に続き、同グループで休耕田を借り受け、約五千平方㍍に約十二万本のヒマワリを植えた。

岩の原が〝金メダル〟

（八月九日）

七月末に山梨県で開かれた国産ワインコンクールの国内改良等品種・白部門で、岩の原葡萄園（上越市北方）の白ワイン「レッド・ミルレンニューム二〇一一」が最高賞となる金賞・部門最高賞を受賞した。同社の坂田敏社長（六二）は「何と言っても金賞、金メダルは特別にうれしい」と満面の笑みを浮かべた。

同コンクールは十回目。日本ワイナリー協会や山梨県ワイン酒造組合などが実行委員会となって国産ワインの品質と認知度向上を図るために開いている。欧州系品種、北米系等品種、ロゼワインなど十三の部門があり、今年は計六百九十品がエントリーした。

ニュービジネス研究会 十二社合作で野菜工場

（八月十一日）

上越市内の民間企業が共同開発し、三和区の多能鉱泉に置いた野菜工場実験棟で十日、野菜の初収穫が行われた。装置は風力、太陽光といった自然エネルギーを利用して照明を点灯させており、室温二五度程度の実験棟内で水と

光を利用しレタス数種を育てている。

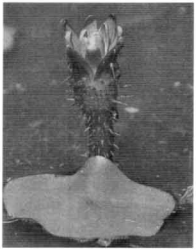
取り組むのは上越商工会議所加盟の十二社で構成する「ニュービジネス研究会」（会長・小林清作ウエカツ工業社長）。

三和区島倉の谷内池 十数年ぶりオニバス咲く

（八月十八日）

三和区島倉の谷内池でこのほど、絶滅危惧（きぐ）種で本県が自然分布の北限といわれるオニバスが十数年ぶりに開花した。

名前の〝鬼〟の由来というトゲの生えた茎から、鮮やかな紫色の花が咲き、見る者を魅了する。再生に尽力した地元住民らの熱意が実った。



パラグライダー・スチューデント杯 原風景見渡し飛行

（八月二十四日）

吉川区の尾神岳（七五七㍍）で二十三日までの三日間、パラグライダー大会「スチューデントカップ2012」（実行委員会主催）が行われた。大学生が、色鮮やかな円形の翼を広げ、原風景を見下ろしながら飛行していた。

主な競技方法は、周回して速さを競う「バイロンレース」と滞空時間の長さを競う「デュレーション」で、離陸場と着陸場の標高差は三百五十㍍。そのほかオープンクラスが設けられ、首都圏や東北地方の八大学から二十七人が出場した。

春日山に戦国絵巻 出陣行列に十七代当主

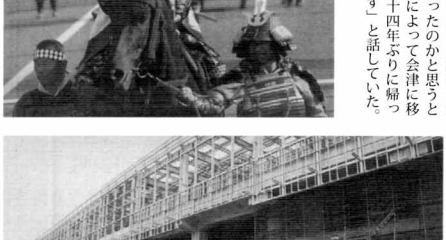
（八月二十七日）

郷土の英雄、上杉謙信公の遺徳をたたえる「第八十七回謙信公祭」は二十六日、祭りのハイライトとなる「出陣行列」（謙信公銅像前―春日山城史跡広場）と「川中島合戦の再現」（春日山城史跡広場）を行った。今年は上杉家十七代当主の上杉邦憲さん（六九）が上杉謙信役で出陣行列に登場した。

武者姿の上杉軍、武田軍約五百人が青天の下、堂々の出陣。

大役を終えた上杉さんは「謙信公が出陣する時はこうだったのかと思うと感慨深い。豊臣秀吉によって会津に移封されてから、四百十四年ぶりに帰って来たので感無量です」と話していた。

新幹線新駅に併設へ 四十億円投じ脇野田駅移設

（八月二十九日）

平成二十七年春開業の北陸新幹線上越駅（仮称）に併設されるＪＲ信越本線脇野田駅の移設工事が、九月から本格化する。二十八日、上越市大和五の建設予定地で安全祈願祭が行われ、新幹線駅工事などと同時進行する工程の無事故無災害を願った。駅舎は二十六年中に完成。ＪＲの経営で開業を予定。新幹線開業とともに「越後トキめき鉄道」（嶋津忠裕社長）が経営を引き継ぐ。